

インドネシア人 研修生受け入れ計画と現状

野村 忠昭*

Tadaaki Nomura

IIC 相生事業所では平成17年11月にインドネシアより非破壊検査の研修生2名を受け入れ、その後毎年1名ずつ継続的に受け入れている。

1期生受け入れから約2年経過したところで、受け入れ時の計画と研修生の現状の働きぶり、生活ぶりを紹介したい。

1. 受け入れ機関、選抜方法

研修生の現地での応募、人選、日本語の教育を含め 財団法人・国際研修協力機構 (JITCO)、財団法人・中小企業国際人材育成事業団 (IMM Japan) を利用してインドネシア人を受け入れることにした。

これらの機関を利用することにしたのは、IHI 相生事業所内の AMTEC (IHI マリン ユナイテッドの子会社) が既に同機関を通じて2年前からインドネシア人の研修生を受け入れた実績があり成果を挙げていること、IIC と同時期に IHI 相生工場が同機関を通じて15名のインドネシア人溶接研修生を受け入れること、およびインドネシアのチレゴン (ジャカルタから高速道路で2Hr 程度離れた場所にある都市) に IHI 相生工場の分工場があり、研修を終了した人が日本で習得した非破壊検査技術を生かせる場所がある等の理由であった。

日本で研修を希望する研修候補生はインドネシア各地で応募し選抜されると、4ヶ月の日本語教育をインドネシア各地の職業訓練校で集団研修す

る。各地の職業訓練校には数百名単位で候補生が研修している。弊社はジャカルタの近くにある職業訓練校で研修している候補生の中から当方の要望 (チレゴン工場 UT 検査に従事するために必要な数学がある程度できる、パソコンを使った経験がある等) を満たす者を10名程選んでもらい、ジャカルタで面接し最終的に研修生を2名選んだ。選抜された2名は日本に到着した後、他社に配属される数十名と共に更に3週間の集団教育を受け、IIC 相生事業所で研修することになった。

2. 研修、雇用計画と現状

最初の1年は研修期間で1年の就業時間の20% (約400時間) は非実務研修と称して、現場とは別の場所で講義と実技研修を受けた後、現場で技能を修得する。研修1年目の終了時、技能終了試験があり、合格すればそれ以降2年間の雇用が認められ、都合3年間 日本での研修および雇用が認められることになる。

研修生には帰国までの3年間の間に、MT,PT,UT の基礎を理解させ UT の何らかの国内資格をとらせたいと計画した。指導員は最初の3ヶ月間、IIC の OB を専属で採用し、非破壊検査基礎理論の講義と UT, MT, PT の実習を毎日繰り返した。彼らの日本語はまだ完全ではなく、まして難しい非破壊検査の専門用語の説明に指導者は多大な苦労をした。

* 西日本事業部 事業部長

溶接部の非破壊検査には溶接についての知識が必要なので IHI 相生工場にお願ひし、2 週間程溶接の実習も行い各種の溶接方法も体験させた。ブローホール、融合不良、スラグ巻き込み等自分が溶接した継手にどのような欠陥が入っているか、X 線撮影により実体験してもらった。始めた頃の研修は半分以上日本語の教育要素が大であったが、彼らも宿舎で懸命に日本語を勉強し、1 年目で日本語検定能力 3 級に合格した。

親会社の IHI 相生工場の職員や市の学校の先生のボランティア活動で日本語、英語を教えて下さった方々には引き受け先として大変感謝している。

研修生は 1 年間の研修の終了証明として県の職業能力開発協会による機械検査基礎 2 級技能検定の試験を受検した。簡単な筆記試験とノギス、マイクロメータを使用し、試験体の寸法を測定するものである。日頃製品の寸法検査、肉厚検査を実施しているので、なんとなく合格した。2 年目以降は主に IIC 社員の補助員として PT, MT, UT 検査を実製品で実施している。パソコン操作も若いだけに習熟が早く、検査レポートもパソコンで作成させている。当初の目標であった非破壊検査協会の UT2 種資格は一次筆記試験のハードルが高く（日本語の専門用語が難しい。）ASME の UT 資格取得に変えるべく検討している。

3. 日常生活、研修、勤務態度

現在、IHI 相生工場および IIC で研修、雇用され



ている彼らの仲間は 40 名弱おり、相生事業所の同じ研修宿泊施設に和気藹々と集団生活をしている。インターネットでインドネシアの食材を購入し 6 名 1 グループ単位の研修生が交代で自炊している。

昼食を除いた 1 ヶ月の食費が 1 人当たり平均 8,000 円とは見事なものである。

研修生は相生で生活を始めて概ね 4～5 カ月で先ず大阪でパソコンを購入してインターネットを始め、色々な情報を入手し、家族とメールのやり取りをする。

ウェブカメラを付ければ家族の顔を見ながら話をすることもできる。

インターネットで日本語講座の配信もされており自室で勉強でき、異国で IT をフルに利用する点では我々よりも進んでいるかも知れない。

彼等の日常の研修、勤務態度は国民性か、多くの候補者の中から選抜された為か、概して真面目で素直であり、挨拶もしっかりできとても明るい。「日本の若者が忘れかけている明るさ、素直さは話しても気持ち良い。」と思うのは私だけであろうか？

研修生は 1 年もすればすっかり環境に慣れて成長し、環境が変わると若い人はこれ程成長するものかと感慨深いものがある。

当方は技術、言葉を教えているが同時に彼らから新しい事に挑戦する勇気、元気、明るさをもらい、得ることも多い。今後とも彼等にとっても我々にとっても有意義な研修時間を積み重ねていきたい。



西日本事業部
事業部長
野村 忠昭

TEL. 0791-23-3720
FAX. 0791-24-2748